

(14) Ibid., p. 25.

(15) Ibid., p. 212.

- \* 自然主義的誤謬：二〇〇頁等で「であるべきである」誤謬と呼ばれているものも同じである。一般に観察できざる事実がどうで「ある」かに関する判断から、価値判断あるいは人間のとる「べき」行為（当為）に関する判断が導き出せると考えること、あるいはロールストンがそうであるように世界／事物は価値的な性質（よい、悪い）を含んでいると考えることは、間違いだとする、ヒューム以降の有力な哲学説。
- \* \* 義務倫理：徳倫理（上巻の「エマソン」の末尾の注参照）に對置される語で、一定の状況ですべての人に同じように求められる道徳的に正しい行為、つまり義務は何であるかを問う倫理学。

↑キヤリコット、レオポルトも見よ。

#### ■ロールステンの主要著作

<sup>15</sup> 'Is There an Ecological Ethic?', *Ethics*, 85, pp. 93-109, 1975.

*Philosophy Gone Wild: Essays in Environmental Ethics*, Buffalo, NY: Prometheus, 1986.

*Science and Religion: A Critical Survey*, Philadelphia, Pa: Temple University Press, 1987.

*Environmental Ethics: Duties to and Values in the Natural World*, Philadelphia, Pa: Temple University Press, 1988.

*Conserving Natural Value*, New York: Columbia University Press, 1994.

*Genesis, Genesis and God: Values and Their Origins in Natural and Human History*, The Gifford Lectures, University of Edinburgh, 1997-8; New York: Cambridge University Press, 1999.

値から直接に導き出すことはできない。なぜなら、そのなかで義務「とされる行為」が善を促進し、害悪を妨げる責務として断言されうるような中間的な前提が必要だからである。ロールストンの理論は、非帰結主義的な義務についての理論ではなく、一般的な責務が善を生みだすことへの責務であるような、帰結主義的理論であるように思われる。

注

- (1) *Environmental Ethics*, p. 188.
- (2) *Ibid.*, pp. 61, 79, *passim*.
- (3) *Conserving Natural Value*, p. 4.
- (4) *Philosophy Gone Wild*, pp. 40-6.
- (5) *Environmental Ethics*, p. 207.
- (6) *See Genesis, Genesis, and God*.
- (7) *Environmental Ethics*, chap. 6.
- (8) *Philosophy Gone Wild*, p. 19.
- (9) *Ibid.*, pp. 19-20.
- (10) *Environmental Ethics*, pp. 186-9; *Conserving Natural Value*, pp. 68-100.
- (11) *Ibid.*, pp. 155-7. Rolston cites D.W. Raup and J.J. Sepkoski, *Science*, 215, pp. 1501-3, 1982.
- (12) *Philosophy Gone Wild*, p. 25.
- (13) *Ibid.*, pp. 22-4.

種は生態系のなかの本来の正常な場所で保存されないならば、保存されることはできず、進化が止まってしまおうからである。

ロールストンの思想にたいする学者たちによる異論は、おもに五つの方向からなされている。第一に、エコフェミニストとソーシヤル・エコロジストは、ロールストンは進化する自然における内在的価値、価値支配、複雑性の出現という観念のなかで、あまりにも上下の位階秩序にとらわれすぎていると主張する。第二に、プラグマティスト、とくにブライアン・ノートンは、内在的価値という概念には意味がないとしりぞけ、かわりに「非道具的」価値というカテゴリーを提出する。ほかには、とくにJ・ペアード・キャリコットとユーージン・C・ハーグロブは、価値は必然的に主観的な要素をもつ、つまり、もしだれか——心もしくは主観——が価値判断を行なわなければ、価値は存在しないと主張する。第三に、ほとんどの哲学者は、自然主義的誤謬という考え方は正統であると考えつけている。自然主義的誤謬はさまざまな論理的形式をとるのであり、ロールストンは彼が反論している当の形式についてのより詳細な分析を必要とする。第四に、ロールストンは彼の哲学が、環境倫理学の完全な理論と決疑論(個々の具体的な行為の是非の判定法)の端緒にすぎないと認めている。通常、相対的にひろい実践的かつ理論的な論点とともに、特殊なケースを含む多くの衝突が、まだ解決される必要がある。最後に、筆者は、ロールストンの倫理学理論はせいぜいのところ、実際には容易に乗り越えられてしまう(他の行動が優先される)善行という、非常に弱い「一応の義務」を提出しているのだと、論じたことがある。厳密な義務は内在的価値も含め、価

そして完全性を保存する行為であると主張する。しかしながら、生態系の現状を保存することは義務ではないかもしれない。というのも、人間は環境を改善し、つくり変えることができるからである。現代物理学からの比喩をもちいてロールストンは、完全性とは、種と個体、捕食と共生、建設と破壊、質の向上と劣化を連動させる「場」の機能であると言う。人間の生命を支えることは生態系の本来的な役割であるから、生態系を最大限に利用するために行なわれる飼育・栽培は義務である。生命系の福祉のための改変、管理、そして利用は許されている。「存在すべきものはかならずしも存在しているものと一致しない」<sup>(14)</sup>。

種に関してロールストンは、われわれの義務は種の個々のメンバーにたいするよりも、むしろ生命の形相としての種にたいするものと主張する。種は形相である。これにたいして、個々のメンバーは形相を表現する。「尊厳はダイナミックな形相にある。個体は形相を継承し、その具例となり、それをつぎに渡す」。生物学的にも、生態学的にも、個体は種に従属する<sup>(15)</sup>。

自然において実際に種の消滅が起こることがあるが、自然的な種の消滅は、そこで終わりなのではなく、通常は、多様化、新たな生態学的地位と機会、新たな種と生態学的条件の交替を生じさせる。これとは違い、人間によって引きおこされた種の消滅は、そこで行き止まりであり、多様性を破壊し、単一栽培を生みだし進化を停止させる。種の多様性は進化の継続にとって必要不可欠である。したがって、人間の行為がなんらかの種を危険にさらすときにはいつでも、種にたいする義務がはじまる。われわれの義務には、種だけではなく全生態系を保存することが含まれる。これは、

源的価値として扱う。科学的に啓蒙されているにせよ、人道主義者にとっては、地球を、長期的な視野に立つ生態学と最高の人道主義的な価値にしたがって、たんなる資源として利用しない理由はないであろう。

ロールストンは、生態学は啓蒙され拡大された人間の自己利益「のための科学」だという人間中心の見解を拒否する。われわれが環境を保存するのは、たんにそれがわれわれの最善の、長期的な、経済的、審美的、そして精神的な自己利益にかなっているからではなく、本質的に人間的存在であるものと本質的に生態系に属するものとのあいだには、確固とした境界は存在しないからである。人間の利益と環境の利益は一体である。エゴイズムは「エコイズム」になる。個体と生態系とのあいだの境界は拡散しているので、「われわれは系の価値と個体の価値のどちらが論理的に優先するのかを言うことができない」。個体は「全体によって」抑圧されるのではなく豊かにされるのである。<sup>(12)</sup>

生態学が示す事実によれば、複雑な生命形態は複雑で多様な生態系のなかでのみ、進化・発展し、生き延びる。もしわれわれが知っているような「人間」が生き延びるべきであるとすれば、われわれは海洋、森林、そして草原を維持しなければならぬ。地球という惑星を完全に耕作された田畑と都市に変えてしまうならば、人間生活を貧困化させるだろう。われわれは、また、人間の知的で文化的な生活の進化発展を含む、地球のいつその進化発展を可能にするために生態系を保存すべきである。<sup>(13)</sup>

レオポルドをまねて、ロールストンは、規範的に正しい行為——義務——は生態系の美、安定性、

たものとして、それらは義務と責務を含意する、とロールストンは論ずる。<sup>(1)</sup>

システムの価値は、系の健康と完全性が脅かされている場合には、要素である諸部分を手段として利用することを妨げない。ロールストンの価値支配の原理にしたがえば、人間のいかなる行為も、その行為がなんらかの他の同等もしくはそれ以上の内在的価値を生みだすことがなければ、けつして内在的価値を破壊すべきではない。

内在的価値の衝突は自然にはまずめつたに起こることはない。そして諸個体と生態系とのあいだの衝突は、文化にとつての問題であり自然にとつての問題ではない、とロールストンは言う。言いかえれば、ロールストンは、進化の特徴はより多くの種類と量の内在的価値が生みだされることにある、と主張する。たとえば、バクテリアが哺乳動物に感染してこれを殺すとき、より大きな価値の出現に貢献するのである。進化はより多様な生命形態、より複雑な生命形態、そして、より多数の個体を産出することである。進化のプロセスにおける進歩を停止させる人間の妨害を除けば、価値は自然において高められ増大させられる。

ロールストンは、人間は生物コミュニティのメンバーである——多くのメンバーの一員である——にすぎないがゆえに、ホーリズムは、反人間中心的不是にせよ、非人間中心的事であると論ずる。道徳的な価値は、人間が当然のことながら生態系全体の一部であるとは別として、人間と人間の利害関心から独立した、生態系の全体と見なされる自然環境に帰属する。対照的に、人間中心的人道主義的な考え方は、生態系を人間の目的のために開発・搾取されるべき資

価値は、生態系の要素として個々の事物を考えるかそれともサブシステムを考えるかにかかわらず、あるいはそれらが有する個々の内在的価値を合計するかどうかにかかわらず、系の要素とサブシステムがもつ内在的価値よりも質的に豊かであり、より大きいと、彼は考えているように見える。言いかえれば、全体の価値は部分の価値の総和よりも大きい。系全体の内在的価値は、系全体をつくり上げている諸個体、事物、そしてサブシステムが有する内在的価値の正味の和を上まわる。さらに、系と、要素であるどれかの部分あるいはサブシステムとを比較したとき、系全体が質的により豊かな内在的価値を有していることは、系の健康あるいは完全性が脅かされるときにはいつでも、諸部分は犠牲にされうるということを含意しているように思われる。全体としての系はより低い内在的価値にたいする支配を掌握しており、質的にそれらを高める。そうすることによって、個々の〔要素の〕内在的価値の正味の和を上まわるのである。

自然的システムの内在的価値という彼の観念を立証するために、ロールストンは進化の歴史に関する研究を引用する。自然において種の多様性が増してきたことの説明は系統的である。つまり、自然は〔システムとして〕より多様で、より複雑な生命の形態を生み出すという仕方では組織化されているのであると、彼は論ずる。この一般化は、化石に記録された四回ないし五回の破局的な種の消滅にもかかわらず、事実であるように思われる。地球生態系は——明白な制限はいっさいなしに——種の多様性を増大させる自然的な傾向を有する。ロールストンが「系統的」と呼ぶのは、この自然の有する価値のことである。自然のシステムの価値はまた内在的な価値でもあり、そうし

のである。諸々の価値は、ただたんに人格としての人間に場所をもつ「人間が価値の根拠である」というよりも、むしろ、集合的に場所を移しかえられて、環境のなかの人格としての人間に場所をもつのである。生態系の価値は「人間によって主観的に」押しつけられるものではなく、すでにそこに存在していることが発見されるのである。「われわれは、秩序、調和、安定性という性質、つまり経験的内容は「人間によって」自然に付与されるのと同様に、自然から引きだされるものだということに気がつく」。実体的で経験的な内容は、自然のなかにある。人間やその他の価値判断を行なう存在から独立の自然のなかにある。それゆえに、「生態系の」価値は適切にそして最も明白に「内在的価値」と呼ばれる。ロールストンは主張する「……ここでは「すべきである」は「である」から派生するというよりは、むしろ「である」と同時に発見されるのである」。

価値の理論として、生態学的なホーリズムは、個体的事物であれ、集合的な生態系であれ、あらゆるものがなんらかの意味で道徳的に有意義であり、価値があると主張する。ロールストンは、価値は事物のなかと同時に系のなかに、直接的にかつ内在的に存在する。その事物あるいは系が、理性的で、感覚をもち、意志的である、あるいは生きている、人間やその他の存在と関係があるからという理由で、それら事物や系のなかに、たんに間接的に——道具的・手段的に——価値が存在するのではない、と主張する。

ロールストンが好む用語をもちいれば、進化発展する生態系のレベルで現れる価値は「システムの」である<sup>10</sup>。ロールストンは、システムの価値は内在的だと主張する。さらに、システムの内在的

(生物)は「生命力」をもつ。無生物とは対照的に、すべての生物は四つの特徴を有する。(一) それぞれの個体はアイデンティティをもつ。(二) 自己自身を防衛する。(三) 目的である終わり(テロス)をめざして機能する。(四) 生物はそれ自身の内部、そのDNAのなかに情報をもっており、それは生殖をつうじて他者に受け渡される、あるいは伝達される。これらの特徴のおかげで、有機体は価値評価の中心なのである。たとえ意識をもたないものであっても、それに何が起こるかは重要である。それにくわえて、自然の有機的進化は、個体と種の数(つまり量)の、また生命の形態の複雑さ(つまり質)の、両方を増大させることにより、価値を支配し時間のなかでそれを拡大・前進させていくという意味で、価値投企的 projective である。<sup>(7)</sup>

「である」すべきである」誤謬説を否定しつつ、ロールストンは——価値と義務の両者を含む——道徳が生態系のホーリスティックな性格に由来するとする自然主義的な倫理を擁護して論ずる。「実体的な価値は、何か経験的なものが価値の存在場所として特定されるときにのみ、現れる」とロールストンは主張する。<sup>(8)</sup> 好むと好まざるとにかかわらず、すべての価値は地球生態系の内部における可能性と制限により、客観的に根拠づけられ、支えられている。

ロールストンはホーリズムにとって必要不可欠な価値の概念、つまり、美、安定性、そして完全性というレオポルドの唱えた概念が人間的なもので、おそらく非自然的なものだということは認める。にもかかわらず、諸々の価値は、人格としての人間と客観的な環境とのあいだの関係と相互作用の産物である。美、安定性、完全性とみなされるものは、世界と概念との相互作用から出現する

された」文化と対照的に、自然は「自生的」で「非反省的」である<sup>(3)</sup>。自然の諸過程は法則的であり、規則正しいが、また確率的でもある。そして進化する生態系の創造性において証拠が示されているように、新たな歴史的展開にも開かれている。自然選択は、遺伝と結びついて、価値を生みだす。

ロールストンは人間が自然のなかの存在であり、多くの重要な点で自然の一部であることを認める。たとえば、われわれの身体は生物学が教えるところによればまったく自然的である。彼はしばしば人間（と人間の文化）が自然のなかから「発生」*emerged*したと言う。ロールストンにとっては、「原生自然」とは人間の介在から自由な自然環境と同義語である。原生自然、田園文化、そして都市文化が現存世界の三つの「環境」をなしており、それぞれはそれ自身の特定の内在的な善を有している<sup>(4)</sup>。

ロールストンが形而上学的前提に立っていることを理解することが、彼の倫理を理解するために必要不可欠である。彼の明白な形而上学的前提は、生物学的かつ進化論的傾向の強いものである。しかし、彼は、自然のできごとには「すべて偶然によって」<sup>(5)</sup>起こるということを否定する点で、現代の進化論の理論とは見解を異にする。ロールストンの哲学は根底において生物学的であるだけでなく、有神論的でもある。自然の起源、秩序、歴史的新奇性に究極的説明を与えるのは神なのである<sup>(6)</sup>。ロールストンの偶然的否定は彼の言う有機的原理と整合している。この原理は、すべての生物の個体は最も単純な細胞から最も複雑な多細胞の有機体まで、内在的な価値を有しており、それゆえに、適切な尊重に値するのだという主張である。無機物（無生物）と違い、すべての生きた有機体



はじめた。ロールストンは一九六八年に修士号を取得したあと、フォートコリンズのコロラド州立大学の哲学と宗教学の教授に任命された。そしてそれにつづく数十年のあいだに、彼は国際的な学者として認知されるようになり、現在は格式ある有名教授の地位を有している。多くの学問的な業績をあげただけではなく、彼は地方の長老派教会における聖職者としての地位ももちつづけている。

ロールストンの著作全体をつうじて、五つの考えがしばしばくり返し現れる。(一)自然の内在的価値。この価値は人間中心な価値ではなく、反人間中心ですらある。というのも、それは人間から独立した、人間と無関係な価値だからである。(二)生態学的・システムの *ecological-systemic* ホーリズム。(三)「人間の」自然にたいする義務は自然の内在的価値から派生すること。そしてこのことは論理的に「であるべきである」に関する自然主義的誤謬の否定を含意する。(四)形相、ないしは集合としての種、つまり生物／生命が内在的価値をもつということ。そして(五)生命中心主義。つまり、すべての生物個体が内在的価値をもち、この内在的価値から個々の生物を尊重する義務が派生するということ。

ロールストンの環境倫理学の理論の中心には「内在的価値」および「ホーリズム」の概念がある。アルド・レオポルドはホーリズムを「コミュニティ〔共同体〕」と「土地倫理」という彼独自の語をもちいて提出した。ホーリズムは生態学において必要不可欠な概念であり、現代の環境倫理学のすべての理論において中心的な要素になっている。ロールストンの理論においては、生態学的全体は内在的な価値を有するものである。彼の説く倫理は明白な義務倫理であり、彼はこの義務を「自然

から引いていた。

デヴィッドソン・カレッジの学部学生として彼は自然を研究したいと思い、そこで物理学（自然学）の学士号（科学学士、一九五三）を修得したが、ときどきは余分に生物学の単位も取った。彼の父および祖父と同様に、長老派の牧師になる計画を立て、ロールストンはつぎにバージニア州リッチモンドの統一神学校で神学の学士号を取得した（一九五〇）。そのつぎにスコットランドのエジンバラ大学で神学と宗教学の研究で博士号を取った（一九五八）。つぎの一〇年間、彼はテネシー州とノースカロライナ州との州境に近い、バージニア州西部のアパラチア山地で牧師を務めた。彼と妻のジェーンは息子と娘の、二人の子供をもった。

ロールストンは牧師をしていたが、暇なときには、イーストテネシー州立大学に通い、南部アパラチア山地の生物、鉱物、地質の研究を行なって、名のおった博物学者（自然誌家）、蘚苔学者になった。彼はまた野生生物を保全し、マウント・ロジャーズとローン・マウンテインを保存するとともに、アパラチア山地の登山道を守り、また位置替えをするなどの活動も行なった。

自然の世界を研究しているうちに、ロールストンは、自然のなかに価値があると考えるようになり、その価値を説明したいと思った。また、彼が宗教において信じていることと、生物に関する諸科学の無神論的自然主義とのあいだの知的な衝突を解決したいとも考えた。こうして彼は哲学の研究が必要だと感じた。彼は愛するバージニアを離れて、ピッツバーグ大学で科学哲学の研究を行なった。ここで彼は自然の内在的価値についての理論と自然主義的誤謬説にたいする反論の定式化を

る。だが、深さにおいてみれば、それらはひとつの全体をなす。たぶん、ときには産物にたいする義務が、それらを産みだした系システムにたいする義務に優越することがある。しかし——自然のなかで生きると同時に文化のなかで生きる人間を別とすれば——こうしたことはめつたに起こらない。<sup>(1)</sup>

とくに、「倫理学」誌（一九七五）におけるロールストンの初期の先駆的な論文と、彼の著書「環境倫理学」（一九八八）における、包括的で十分熟した倫理学の理論の定式化が与えた影響は大きかった。一九九七年、スコットランドのエジンバラ大学で、格式の高いことで知られるギフォード・レクチャーの講義を行なったが、これは「遺伝子、発生、神」というタイトルで出版された（一九九）。

ホームズ・ロールストンⅢは一九三二年一月一九日に、プレスピテリアン（または長老派）の牧師の父と祖父の息子、孫として生まれた。彼はこの二人と名前を共有している。夏のあいだアラバマ州で、彼の母の両親の牧場で過ごしたことを除けば、ロールストンは子供の時期を、バージニア州のシェナンドー・バレーで過ごした。彼の父はこの地の長老派の牧師でかつ尊敬された神学者であった。こうした田園地帯で育った結果、ロールストンは自然を愛し、簡素であることを重視するようになった。彼が育った家は森の奥まったところにあり、目の前にはモリー川が流れていた。そしてブルーリッジ・マウンテンズが地平線をなしていた。家には電気がなく、水は自然の貯水池

“Holmes Rolston III.” Translated into Japanese. Vol. 2, pages 194-208 in *Kankyo no shisoka tachi [Fifty Key Thinkers on the Environment]*, trans. Sudou Jiyuji (Tokyo: Misuzu Shobo, 2004). ISBN 4-622-08162-8. From: *Fifty Key Environmental Thinkers*, Joy A. Palmer, ed. (London: Routledge, 2001). By permission.

## ホームズ・ロールストン III

1932-

Holmes Rolston III

ホームズ・ロールストン III は専門の学問分野としての環境倫理学の「父」としてひろく知られている。ロールストン以前に他の人びとが種を蒔いたが、その種はおもに構想の段階にとどまっていた。彼は他の人びと以上にさまざまな構想をもったが、専門の学問分野としての環境倫理学の本質的な特徴、領域、そして重要な論点を形成した。

ロールストンは多数の著書と論文の全体の中で、義務は内在的な（他の目的に従属するのではなく、それじたい尊重されるべき）価値から帰結するという考え方を示している。「環境倫理学」のなかで彼はつぎのように言明している。

義務は、系システムのなかの内在的価値の存在場所として生みだされる個々の動植物にたいして発生する……。これら諸個体と種にたいする義務は、生態系にたいする義務と衝突するどころか、生態系の産物と生態系の発展方向（の両者）に役立つ義務である。義務のレベルはさまざまであ